2012 年 5 月 23 日放送

印象に残る症例①

あべ医院　院長　　**福原　恵子**

私は現在、島根県で開業医をしておりますが、開業医になったばかりの当初は内科、消化器内科を主な標榜科としており、漢方についての知識はほぼゼロという状態でスタートいたしました。しかし他界いたしました私の父である先代の院長が漢方医でしたので、医院自体が漢方中心の診療をしていたこともあって、私も少しずつ診療に取り入れるようになりました。徐々にその効果が出るようになると、漢方薬を希望して来院される患者さんの割合が少しずつ多くなり、今では当院の新患の８割以上に漢方を処方しています。

地方の一診療所ですので、やはりプライマリーケアが診療の中心になります。老若男女、頭の先から足の先まで様々な症状に対応しなくてはなりません。そんな時、漢方は本当に大活躍してくれます。漢方が使えなかったら絶対に治せなかっただろうという症例を診るたびに漢方の素晴らしさを実感します。

今日はその中の皮膚疾患の一症例をご紹介したいと思います。「皮膚は内臓の鏡である」と言われます。漢方薬で治療する場合には単なる皮膚だけの異常ととらえず、気血水や五臓の状態など全身を考慮する必要がありますのでかなり複雑なケースもありますが、その分、皮膚疾患の治療効果はビジュアル的にはっきり現れるので患者さんも医師側も確かな手ごたえを感じることができます。

症例は 12 歳の男の子です。3 歳の頃に右眼の周辺に単純ヘルペスが出現しました。その後、同じ部位に蜂窩織炎を併発して入院した既往があります。それをきっかけに顔面の様々な箇所に度々単純ヘルペスが出るようになり、その都度、近くの医院を受診し抗ウイルス剤を 3～4 日内服して治すということを繰り返しておられました。血液ならびに他の検査上は特に異常を認めなかったため経過をみておられたようですが、ヘルペスの出演頻度は減るどころか増えていき、12 歳の今では部活の練習などで疲れたときや、プールの授業の後などに月 1 ～ 2 回は出るという状態でした。最初に当院を受診された時に漢方治療を勧めてみましたが、お母さんの反応はイマイチでした。どんな治療でもそうですが、特に漢方治療については患者さんのモチベーションが大切です。こちらは処方したくてうずうずしても患者さんが乗り気でなければ無理強いはしないことにしていますので、お母さんの希望どおりの薬を処方しました。当然その後も度々来院されましたが、いつも同じ抗ウイルス剤を処方する診療が続きました。本当にこのままでいいのかしら、と思っていたそんなある日、お母さんの方から「やっぱり漢方飲ませてみます」と申し出がありました。やっとその気になってくれたのですから絶対に漢方を飲ませて良かったと思ってもらわなくてはいけません。自然と気合が入りました。

その子は、身長 154cm、体重 42kg、朝なかなか起きられない、食は細めで、暑がりでよく汗をかく、緊張しやすい性格とのことでした。2 便に異常はありません。舌証はやや暗紅、湿、軽度の裂紋および舌下静脈怒張を認めました。脈証はやや沈、やや細、やや弱。腹証は心下痞硬、腹直筋の緊張、左右の軽度胸脇苦満、臍傍部に軽度の圧痛を認めました。非常にくすぐったがりで大笑いをしながら体をくねらせるので、これだけの所見をとるのは大変でした。体に触れられることを嫌がる子供は時々いますが、こういった反応は知覚過敏として一つの所見ととらえます。五臓のうちの“肝”が関与しているという考えから小柴胡湯、柴胡桂枝湯、柴胡清肝湯などの柴胡剤を考慮する場合がありますが、小建中湯証でもくすぐったがりの子供はかなりいます。この症例は小建中湯が真っ先に頭に浮かびましたが、治療する目的が皮膚疾患であることを考え、処方はツムラ黄耆建中湯エキスを 18g/日、分 2 としました。内服を開始して最初の 1 ヵ月半の間に単純ヘルペスが 2 回出て抗ウイルス剤を処方しました。しかし 2 回目はいつもよりも軽く済んだとのことでした。

感触がつかめたので、さらにそのまま内服を継続したところ、それ以降、一度もヘルペスは出なくなりました。また、もう一つ明らかに変化がみられた点がありました。朝が弱くてなかなか布団から出られないお子さんでしたが、漢方を開始してからはすっと起きられるようになったのです。これもお母さん、本人とも驚きだったようで受診のたびにヘルペスのことよりも真っ先にその話をされるくらいです。また、当初、息子さんの漢方治療になかなか踏み出せなかったお母さんでしたが、今ではお母さんご自身も漢方を希望して来院されるようになりました。

単純ヘルペスの西洋医学的治療はアシクロビルやバラシクロビルなどの抗ウイルス剤の軟膏を塗布したり内服を行います。たいていそれで一旦は速やかに改善しますが、もちろんそれは根治的な治療ではありません。神経節に潜伏している単純ヘルペスは風邪、過労、紫外線、ストレスなどをきっかけとして再発を繰り返すことが非常に多いのはご承知のとおりです。しかし現在のところ性器ヘルペス以外には単純ヘルペスの再発を抑制する予防的治療の適応はありません。本症例の患者さんのように、こんなに頻繁に出る場合でもその都度抗ウイルス剤を投与するしかないのです。

黄耆建中湯は小建中湯を構成する芍薬、桂皮、大棗、甘草、生姜、膠飴に黄耆を加えた処方です。金匱要略を原典とし「虚労裏急、諸ノ不足ハ黄耆建中湯コレヲ主ル」とあり、虚証で気力、体力、その他、色々足りないような人の種々の慢性消耗性疾患に用いましょうという意味です。小建中湯よりも一段と虚しているイメージととらえてもいいかもしれません。小建中湯は虚弱で疲れやすく腹診で腹直筋の緊張が目立つ胃腸の弱い子供に使用する処方として有名です。また先ほど言いましたが、非常にくすぐったがる場合があります。今回の症例は問診では特別に胃腸が弱いという情報はありませんでしたが、食が細めであるという点から胃腸はさほど強くないと推測されましたので、総合的には小建中湯証と考えました。実際、この症例には小建中湯を処方しても良かったと思います。ただ、黄耆がどういった働きをする生薬かということを考えれば、やはりここは黄耆建中湯を使いたいところです。

江戸時代の代表的な薬物書である「古方薬品考」にはその働きについて「元を益し、衛分を固実す」と書かれています。元気をつけて、体の表面を強くする、というような意味ですが、具体的には気虚の人に気を補う補気作用、特に体表面の気を調え、病邪から体を防衛する働きがあり、汗を止め、利水し水腫を除く、排膿し傷口の回復を早め皮膚の再生を促す、といった目的で用いられています。要するに体力が無くて皮膚が弱くて皮膚の感染を起こしやすい状態で水腫などの水が関与した病態に適応があるわけですから、まさに今回の症例のような虚証の人の水疱をともなう単純ヘルペスにぴったりといえますね。

皮膚疾患の患者さんは私の医院ではアトピー性皮膚炎が大多数を占めますので、私は黄耆建中湯をアトピー性皮膚炎の子供に使用することが多いのですが、虫ささがすぐにとびひになったり、伝染性軟属腫つまり水イボなどの皮膚のトラブルを抱えている虚弱な子の体質改善などにも黄耆建中湯を使っています。いずれも大変良く効きます。成人量が 1日 18g と分量は多いですが、膠飴という飴が大量に入っているため甘くてとても飲みやすく大抵の子供は飲んでくれます。大人でも胃腸が弱く体力がなくて寝汗などを訴えるような人には適応があります。今後もし、先生方がそういった患者さんに出会われた場合には是非この黄耆建中湯を選択肢の一つとして考えていただければ幸いです。